

て五十里百里隔たつた東京の人の手に出来ようか
 更に又自分の家の暮し向きをあかの他人に立て、
 貫はねばならぬといふは、何といふ意氣地のない
 主婦であらうか、とは平生から考へて居た所だが
 近頃の六合雑誌にも同じ様な意味の論説が見えた
 ▲収入の十分の一乃至八分の一を以て家賃に當て
 よといふ原則は、少くとも今日の東京に於ては出
 來ぬ相談である。五十圓の収入の人の棲むべき、
 五圓乃至六圓の家は金の跬で尋ねても見當るもの
 でない。敢て家主の肩を持つのでないが、今日の
 家政を考へる人は家賃に向つて餘り制限し過ぎる
 でないか、十五圓とか二十圓とか纏めて出すから
 多すぎる様に思ふのだが、家族の一人前に分つて
 見ると大低は月に二三圓に當る、夫で以て雨露を
 凌ぎ、疲を醫し、樂しき家庭を造つて行かれるこ

とを思へば、家賃をたい捨てる様に思ふのは間違
 つて居る、家賃は食費と同じ位に出しても宜から
 うと思ふ。

▲別して女の「ハイ」Yesといふ言葉には裏がある
 心では随分「否」Noであつても、大低までは「ハイ」
 といつて仕舞ふ。殊に目上に向ては、よくの
 場合でなくては「否」Noとは言ひ得ぬものである。

故に婦人を職員として使ふ人は、たゞ「ハイ」Yesと
 いつたからとて、自分の意見が心から賛成せられ
 たものと思つて、どしどし實行しては、随分酷な
 ことにもなるものである。

愚 感 一 束

相州國分寺の傍 平 岩 繁 治
 ▲品川より見送りの人に別れて瀛車の中に飛び込

めば、中に一人の氣高き老婆と、一人の少年とがあり。余はこの二人に對して座に就いた、瀟車の進行と共に窓の景色は漸々と打ち變り、見渡す限り田畝の間には、すみれや、たんぽぽ、或は菜の花に蝶の舞う、そか中に幼子までもうち交りて舞ひ遊び居る、さながら廻り燈籠を見て居る様である。其の間先の少年は老婆に向つて、すみれや、たんぽぽの説明に餘念もなかつたがフト「お祖母さんあれは何でしよ」と、老婆答て彼れは「苗代よ、あれから毎日食べるお米が採れるのよ」と懇ろに説明した、少年は一々分つた様な顔付で面白く聞いて居た。

▲或る家の幼兒、他所に使に行くとき先方では、駄賃を呉れるので此の幼兒、使許りは大得意の所、或日使に行つた時、何も駄賃が貰えぬので大失

望、其れからと云ふ者は、如何なる事あるも其の家には使に行かぬ様になつた。駄賃のために子供を働かせることこんなことになる。

▲戦地より母に寄せたる手紙の中に、今度の戦いでは少し左の股に傷を受けたとわつたのを聞いて、或る婦人が、其れを評していふに、「左とは氣が利かぬ、左翼とか右翼とか云うてよこせばよいのに」と又某教師の妻君或る話の折り長女のこゝを長男と云うて平氣でかつた、「ナマカジリ」の漢語つかいにも困つた者である。

▲老翁余に語りて曰ふ、先生實に不思議ですわ、竹の笹までもこんなに戦争を心配して居ます、そら御覽なさいと示したのである、よく見ると成程不思議であつた、男竹の葉に皆銃の形が一つから三つまで出來て居るのである、老翁の話

に依ると六十年以來斯る事は一度もない故に戦争は必ず日本の大勝利です、植物までもこんな

に心配して居るのであるから、國民たる者は尙一層奮發すべきであると話されたのである。

▲又同じ老翁曰く昔から櫻の花は大抵一瓣くになつて散るのが普通であるのに、今年はご覧なさいあの通り大輪のまゝ落ちて居ます、これも一つの不思議です。多分戦勝の前兆である一と

話されたのである。

▲戦勝の喜びは、都も田舎も同じであります、田舎の多くの婦人こそ氣の毒の次第である、此の度の戦争は何のために日本は露國と戦つて居るのか、如何なる原因に依りて戦争は起りしか、さつぱりわからないで只無暗に喜び只心配して居るのである、此れを以て見るも今日の女子教

育の如何なる所まで進んで居るかが分るのである。

▲毎年五月の節句には相模（特に相模川の中流にて）では小なるは半紙一枚から大なるは八九間四方以上の「たこ」を作りて男兒が争て空中高く揚げるのが例であります、昨年も今年も即ち戦争がはじまつてからと云ふものは少さいのが、彼方に一つ此方に二つと云う風で、空を眺めても甚だ淋いのである、いつもなら空が見えぬまでに澤山揚がつて、夜中になつても其れはくぐんぐぐわんく「ウナリ」が鳴り響きて誠に賑やかで勇ましくあります、今年も夢にも見る事は出来ぬのである、時局の影響でもありませうか。

（五月七日記す）

ワタナベ